

「海景観賞の型」からみた海景観賞の形態の変遷に関する研究*

江戸名所図会と明治東京名所図会を通じて

A Study Transition of Form seen from 'Types of Ornamental Seascape'*

—From 'Edo-Meisho-Zue' and 'Meiji-Tokyo-Meisho-Zue'—

實泉立夫**，横内憲久***，岡田智秀***

By Tatsuo HOSEN** , Norihisa YOKOUCHI*** , Tomohide OKADA***

1. 研究目的

ウォーターフロントの魅力の一つである船舶の航行や広大な海といったウォーターフロントならではの景観(以下、「海景」)は、それを眺める人との間に建築物が介在することで多様さを増し、空間的魅力が高められると考える。

そこで本研究では、近代化を契機として西洋の土木・建築技術が移入したことで、新たな建築物・土木構造物等の形態がみられた明治期¹⁾に着目し、「人」「建築物」「海景」の3要素で構成される「海景観賞の型」を捉える。さらに、土木技術の発展や建築形態の変化が「海景観賞の型」にどのような影響をもたらせるかを捉えるために、わが国固有の建築物の形態を有していた江戸期から、建築物の形態に変化がみられる明治期までの「海景観賞の型」が有する形態の変遷とその特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

(1) 明治期における「海景観賞の型」の抽出方法

本研究において明治期の「海景観賞の型」を抽出するにあたっては、「明治東京名所図会²⁾」⁽¹⁾を分析資料とする。この資料から3要素を特定する方法としては、3要素が同時に描かれている絵図(事例)を抽出し、次いで分析資料に記載された各名所(事例)の解説文や絵図の題名(主題)から、3要素の関わりが読み取れた事象を取り上げる。

以上の方法に基づいて得られた3要素の関わりが密接な対象絵図は、分析資料に掲載された全絵図(909事例)のうちの22事例(30景)であった。これら

から「人」「建築物」「海景」の3要素それぞれの位置を、図-1に示す海岸線を原点とする各軸上に布置⁽²⁾し、3要素の交点である空間座標の集合具合と「人」「建築物」「海景」の空間状況を照らし合わせて類型化を行い、「海景観賞の型」を抽出した⁽³⁾。

(2) 海景観賞の形態の変遷の分析方法

海景観賞の形態の変遷を捉えるにあたっては、江戸期と明治期の「海景観賞の型」を比較考察する。そのため、江戸期の「海景観賞の型」については先行研究³⁾において抽出された成果を、明治期は上述した方法で得られた成果をそれぞれ用いるものとする。江戸期と明治期の比較方法としては、全絵図36事例(江戸期:先行研究で得られている21事例、明治期:15事例⁴⁾)を分析対象として、各絵図に描写された要素(構成要素)を抽出・整理する。次いで海岸線を基準とした「人」「建築物」「海景」の位置関係を定量的に捉えるため、3要素の海岸線からの距離を求める。その距離を捉えるにあたっては、「人」「建築物」「海景」の当該要素が当時存在した位置を江戸時代末期の市街の実測図である「復元・江戸情報地図」⁴⁾および明治前期の実測図である「明治前期手書彩色関東実測図」⁵⁾から求めることとする。

以上より得られた、江戸期と明治期の全絵図36事例の構成要素と3要素の海岸線からの距離を分析対象とし、江戸期と明治期における海景観賞の形態を比較することで、その特徴について考察する。

3. 結果および考察

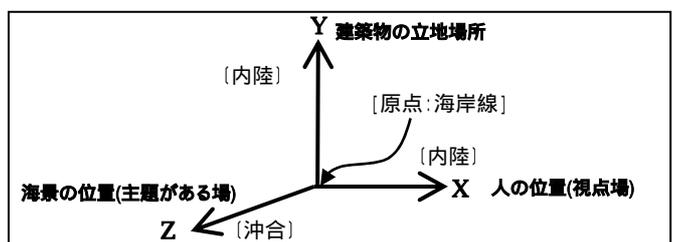


図-1 「人と建築物と海景」の関係把握するための3軸³⁾

*Keywords: 景観, 親水計画, 空間整備, 設計

**学生会員, 日本大学大学院理工学研究科不動産科学専攻

***正会員, 工博, 日本大学理工学部海洋建築工学科

(〒274-8501)千葉県船橋市習志野台 7-24-1, TEL&FAX047-469-5427)

「明治東京名所図会」より捉えられた全対象絵図 22 事例(30 景)の空間状況に基づき、各絵図の空間座標を示したものが図-2である。この図に示す空間座標の集合具合と 3 要素の空間状況により、「開放型」「引き締め型」「視線誘導型」「同時型」「活動誘発型」「水面一体型」という先行研究と同様の 6 つの「海景観賞の型」が得られた(表-1)。そこで以降では、代表的な絵図を用いて各型の特徴を述べるとともに、江戸期と明治期それぞれを対象として得られた絵図全 36 事例の構成要素と 3 要素の特徴を示した表-2を用い、江戸期から明治期における海景観賞の形態の変遷について考察を行う。なお、「視線誘導型」は江戸期と明治期で同一の絵図が捉えられ、変化がみられなかったため、本稿では考察の対象外とする。

①開放型

明治期の「開放型」は、他の型と比して海岸線(原点)から離れた位置に視点場と建築物があり、海景の主題は原点から離れた沖合寄りにある(図-2)。例えば図-3に示す「6. 金亀楼」でいえば、「人」は海岸線から後退して立地する「建築物」の 2 階から「海景」を眺める。ここでは、視点が高い位置にあり、「建築物」の壁面が柱と梁のみで構成される。つまり海側を全面開口とすることで、開放感を得るとともに遠方の縁取られた「海景(帆船)」が享受できる。次いで

表-1、2をみると、この型は江戸期には海岸線より約 200m以上後退した高台に立地する建築物の 1 階(グランドレベル)から海景を一望するのに対し、明治期には海岸線から 200m未満の内陸に立地する建築物の 2 階を視点場として、「広大な海」や「遠方の山々」など 500m以遠の海景を視対象とする事例が複数みられる。このことをふまえると、明治期の土木技術の発達で海岸線近傍における建築物の立地を促し、そこから遠方への眺望を享受するために、高台から建築物の 2 階へと視点場が変化したと考える。

②引き締め型

この型は、建築物と視点場が相対的に海岸線(原点)に近い位置にあり、原点と沖合(水平線)の中間の海上が海景の主題である。たとえば図-4に示す「14. 築地海岸渡船場より佃島を望むの圖」では、海岸線沿いを視点場とし、「建築物」が対岸の海岸線沿いに林立することでその水面が圍繞水域となり、「人」は対岸の佃島の建築群と圍繞水域のにぎわいを享受できる。この型において圍繞水域は明治期に加わった要素だが(表-1)、海岸線より 200m沖合に位置する「広大な海」という茫漠としがちな「海景」を「建築物」が引き締めるというその役割は江戸期と共通する。

一方、明治期の「15. 海岸通り(現在地:横浜市中央区海岸通り)」(図-5)には、添景として描かれた要素

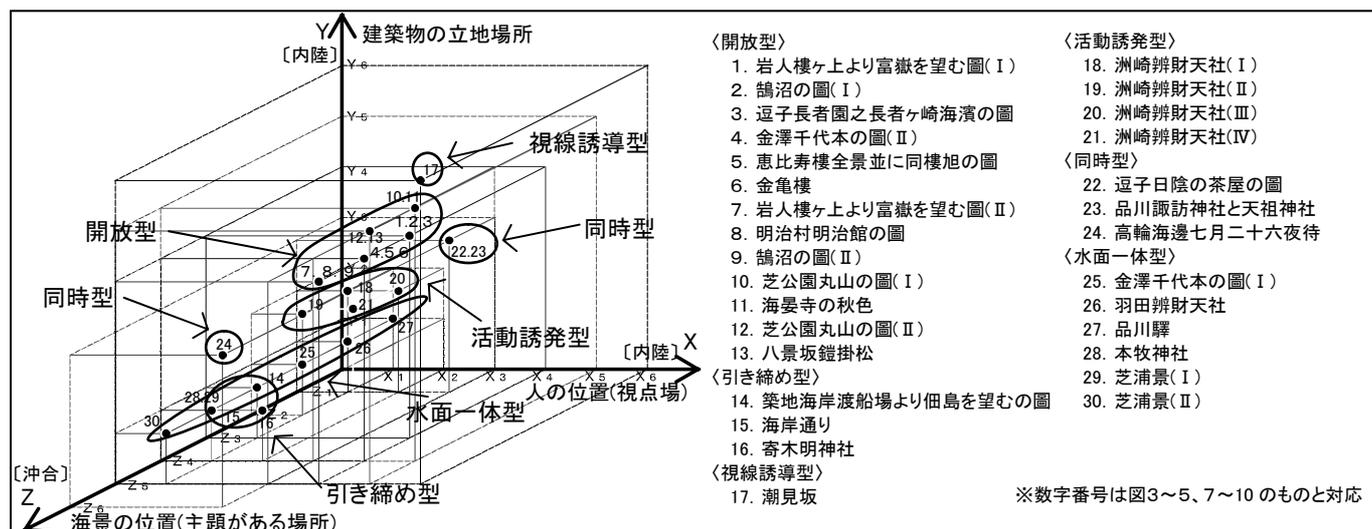


図-2 「人と建築物と海」の関係からみた海景観賞の型

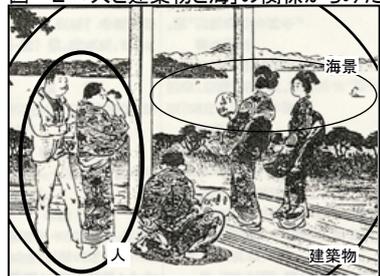


図-3 6. 金亀楼



図-4 14. 築地海岸渡船場より佃島を望むの圖

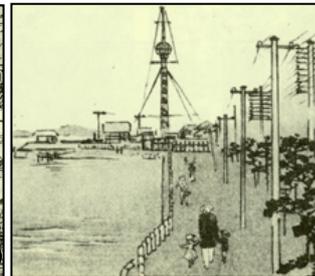


図-5 15. 海岸通り

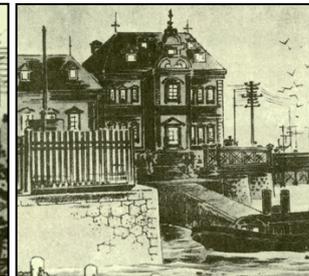


図-6 波止場の夜景

点に最も近い海岸線上との両者がある。「22. 逗子日陰の茶屋の圖」(図-9)では、旅館が水際線から 10 m 後退して立地しているため、その引きの空間(海道)に行き交う人々のにぎわいが創出され、それと海水浴場のにぎわいが「建築物」の低い視点場(1階)から同時一体的に楽しめるものになっている。表-2より、江戸期のこの型の水上のにぎわいは屋形船であったのに対し、明治期では以上のように西洋の水辺の遊興が新たに海景観賞に加わることになる。

⑤水面一体型

江戸期には「海景観賞の型」の中で「人」「建築物」「海景」すべてが海岸線に最も近く位置する「水面一体型」は、明治期になると原点から離れた沖合寄りや原点に近い海岸線寄りが海景の主題となっている。例えば、図-10の「29. 芝浦景」では、解説に「簾を捲けば房総の諸山、盃盤の上に落ちて、風を孕める沖の白帆は、欄干を摩して征歸せむとす」⁽⁷⁾と記述され、36km先にある房総の山々や沖合の帆船があたかも眼前に存在するかのように近くに感じることで、水面との一体感を享受している状況が読み取れる。こうした状況は、海岸線に接岸して立地する「建築物」の床面によって、陸の地表面が不可視となり、「海景」が「建築物」の柱と梁と床面に縁取られることで創出されている。この「芝浦景(現在地:本芝一丁目)」では、江戸期にみられた石積み護岸⁽⁸⁾に比べて高い護岸が築かれ、建築物(料亭)が立地している。このような土木技術の発達で海岸線に接岸する2階建て建築物の立地を可能とし、高い視点場が創出されたことで新たな観賞形態を出現させたといえよう。

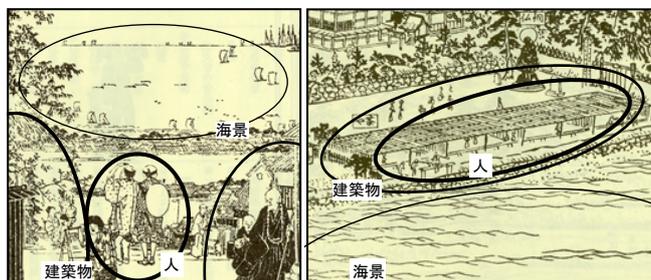


図-7 17. 潮見坂

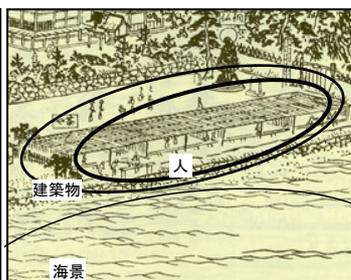


図-8 18. 洲崎辨財天社(I)



図-9 22. 逗子日陰の茶屋の圖



図-10 29. 芝浦景(I)

4. まとめ

本研究では、江戸・明治期の海景観賞の形態とその変遷を明らかにしてきた。そこで以降では、「海景観賞の型」を成り立たせる空間的特徴として海岸線を基準とした際の型と視点場の空間的序列を整理する。

図-11は「海景観賞の型」の視点場が海岸線を基準にどのように位置しているかを平面と高さの関係より示したものである。これより、海岸線から12m程度の視点場(図-11①)では「水面一体型」「引き締め型」「同時型」「活動誘発型」の4型が享受しやすく、その際の視点場の高さは、グランドレベルや建築物の2階となる。その場合の視対象は海岸線付近や遠方の山々など、近景から遠景まで多様な海景となる。また、平面として20~140mの視点場(図-11②)になると、「同時型」「開放型」が得られる。ここでは、視点場が建築物2階や高台に位置しており、海景を俯瞰で享受できる。さらに、海岸線より150m以上離れた視点場(図-11③)では「開放型」「視線誘導型」が得られる。この範囲では海岸線が物理的に遠くなるが、建築物2階や自然の高台を視点場とし、建築物の海側の開口部や高台に備わる植栽など、海へと意識を誘導する要素が海景観賞を成り立たせている。

以上より、江戸・明治期の「海景観賞の型」を成り立たせる視点場位置として海岸線を基準に近(0~12m)、中(20~140m)、遠(150~1000m)という3つの主要位置があることが把握できた。

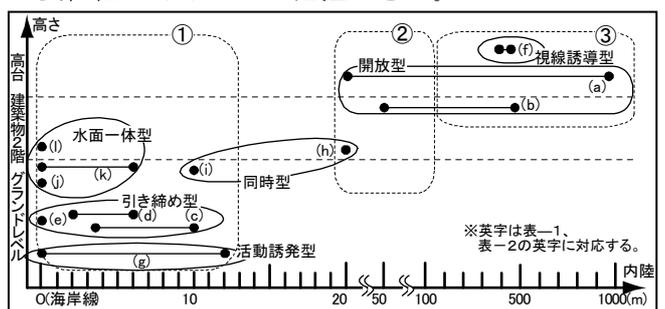


図-11 「海景観賞の型」における視点場の平面的位置と高さとの関係

- 【補注】
- (1)この文献は、明治期に刊行された「新撰東京名所図会」に近郊(東京市近郊、鎌倉、江の島、横浜、小金井)の名所図会を合わせて復刊(1992年)したもので、明治期の情景が仔細に描かれている史料となっている。
 - (2)分析対象である絵図30景について、「人」「建築物」「海景」それぞれの位置を、海岸線に最も近い絵図から最も遠い絵図まで相対的に序列をつけ、各景の目盛上(X: X₁~X₆, Y: Y₁~Y₆, Z: Z₁~Z₆)に布置した。
 - (3)3軸への布置は執著者の既往文献(文獻3)にある。
 - (4)明治期における「海景観賞の型」を捉えるために、分析資料である「明治東京名所図会」(文獻2)より22事例を抽出しているが、これには「江戸名所図会」(文獻6)の絵図も含まれているため(補注9)、これを除く15事例を分析対象とした。
 - (5)江戸名所図会に描かれていた夜景は月の出・日の出となっており、電燈による夜景は描かれていなかった。
 - (6)明治期の地図(文獻7)をみると、「洲崎辨財天社」が立地する前面の海面が埋め立てられていることが確認できる。
 - (7)意訳すると「室内の簾をあげると、房総の山々が盃や皿に映り込み、また手すりの間越しにみえる風を受けてふくらんだ沖合の白帆が迫ってくる感じがする。」
 - (8)江戸名所図会の「潮見坂」には「29. 芝浦景」に対して低い石積み護岸が描かれている。
 - (9)「明治東京名所図会」には「江戸名所図会」の絵図を用い、明治期における名所を説明しているものがある。
- 【引用・参考文献】
- 1) 初田 享: 『都市の明治 一路から上の建築史』、筑摩書房、1981.9
 - 2) 朝倉 治彦・植田 満文: 『明治東京名所図会 上・下巻』、東京堂出版、1992.9
 - 3) 岡田 智秀・横内 憲久・鳥妃 沙子: 『わが国における「海景観賞の型」とその空間構成に関する研究』、土木計画学研究、論文集 Vol.19 no.2, pp.321~330, 2002.9
 - 4) 尾 玉 幸多: 『復元・江戸情報地図』、朝日新聞社、1999.5
 - 5) 迅速測原図復刻版編集委員会: 『明治前期手書き彩色関東実測図』、東京 日本地図センター、1991.3
 - 6) 市古 夏生・鈴木 健一: 『新編江戸名所図会』全8冊、筑摩書房、1996.10~1997.2
 - 7) 渡辺 周一: 『5千分の1 江戸—東京市街地図集成 II 1887—1959』、柏書房